
赤美ちゃん

遥胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤美ちゃん

【コード】

N9303C

【作者名】

遥胡

【あらすじ】

赤ずきんちゃんのように赤ずきんちゃんじゃない？！口も性格も悪い女の子と森に住むもの達の日常のようすで日常じゃない物語。

赤美ちゃん(1)

あるところに、それはそれは可愛らしい女の子がお母さんと森の奥に住んでいました。

ある日、お母さんが言いました。

「赤美^{あかみ}。おじいちゃんが風邪をひいて寝込んでいるそうなの。お見舞いに行つて来てくれる？」

「わかつたわ。じゃあ、お見舞いの品を買つからお金をちょうだい。」

赤美ちゃんは、お気に入りの赤いずきんと硝子の靴を履きながらお母さんに言いました。

「お見舞いの品は、このパイを持っていってくれたらいいわ。あなたにお金を渡したら余計なものばかりかうでしょう。その硝子の靴だって、こんな森の中じゃ歩きにくくて仕方が無いでしょう。」

お母さんはあきれたように娘を見ました。

しかし、赤美はそんな母を気にする風もなく、

「お母さんは乙女心が解つてないわ。確かにお母さんは、もう乙女といえるような年齢ではないだろうけど、心はいつまでも乙女のように純粹で若々しくいるべきだと思つわ。そしたら見た目も、もう少し若く見られるんじゃないかしら？ねえ？お・ば・さ・ん」

赤美ちゃんの家からは、しばらく女の人の叫び声と物の割れる音が森中に響き渡つたそうです。

赤美ちゃんが森の中をトボトボ歩いていると、道端にお金落ちていました。

赤美ちゃんはそれを見つけたとたん走り出しました。森の中にお金が落ちていいるなんて、あからさまに怪しかったのですが、赤美ちゃん

んは今キラキラドレスが欲しかったので、お金が必要だったのです。そのうえ、赤美ちゃんはとつてもわがままで自己中な子だったので、「落ちている物は私の物！世の中の価値ある物は全て、私が持つていくべきだ！」という、ハチャメチャな考えの持ち主なのでした。赤美は、周りをキョロキョロ見回して、今まで見たこともないような速さで道に落ちていたお金を拾いました。すると、不思議なことに数メートル先にまたお金が落ちていて、それが道を外れずとつと続いていたのです。

これは本当に怪しかったのですが、赤美ちゃんは目を輝かせながら、どっどっお金を拾いに行つてしまいました。

数分後、赤美ちゃんの両手がお金でいっぱいになったとき、前の方から視線を感じた赤美ちゃんがそちらの方を見てみると、なんと2m近くある赤鬼がジツと赤美ちゃんを見つめていたのです。

赤美ちゃんが驚きで目を見開いていると、その赤鬼は・・・

「なんて可愛い娘なんだ。」

「・・・はあ？」

赤美ちゃんはその言葉に呆然としました。

「俺は今花嫁を探しているんだが、なかなか良い女が見つからなくてな。こうなったら向こうから来るのを待つか、つてことになつてお金を置いて待つていたんだが・・・まさか、こんなに可愛い子がきてくれるとは・・・v」

赤美ちゃんはその話を聞いて額に青筋を浮かべました。

（というと、何か?!私はこんなアホ面した鬼の作戦にまんまと騙されたというの?!）

赤美ちゃんの怒りに気づかず、赤鬼は嬉々とした表情で、

「俺の嫁になれ！」

と、言いました。

それを聞いた赤美ちゃんから、ブッチンというヤバげな音と、

「何でこの私を騙したアホ面でブツサイクの体だけゴツイ鬼の嫁になんてならなければならぬの?! そんな事よりも、あなたは私の私を騙した罪を償うべきよ! さあ、償いなさい! 今すぐ償いなさい! 一生償いなさい! 地獄の果てまで償いなさい!」

赤鬼はそれを聞いたとたん、目いっぱい涙をためて、赤美ちゃんに謝りました。

外見は恐ろしいのですが、内面はとても傷つきやすい赤鬼だったようです。

赤鬼は、顔をくしゃくしゃにして何度も何度も謝りました。

しかし、赤美ちゃんは許しませんでした。

「何度謝っても、私のプライドは傷ついて治らないの! 私に命令なんて、100億年とんで永久にしてはならないのよ!」

と、よく解らない事を叫びながら、硝子の靴を赤鬼に投げつけてズンズンと来た道に戻っていききました。

あとには、涙目の赤鬼と片方しかない硝子の靴が寂しく転がっていました。

赤美ちゃん(2)

コンコン

「誰じゃ？」

「赤美です。」

「おお、赤美か。入ってよいぞ。」

赤美ちゃんはその声にこたえてドアを開けました。そこには、ベッドから起き上がるうとしていた一人のおじいさんがいました。

「おじいちゃん、お体の具合はどうですか？何か不自由な事はありませんか？これ、お母さんが作ったパイです。よかつたら食べてくださいね。」

さっきの赤鬼に対してとは、明らかに違う声が赤美ちゃんから出てきました。いえ、お母さんに対してもこんな声は出していませんでした。

「赤美はいつも優しいのお。おじいちゃんの自慢の孫じゃよ。さあ、さあ、こつちにおいで。お前が来たら渡そうと思っていた物があるんじゃよ。」

赤美ちゃんは、それを聞いたとたん黒い笑みを浮かべました。しかし、それは一瞬のことで、おじいちゃんが赤美ちゃんの方を向いたときには、普通に笑っておじいちゃんの方に近寄って行くところでした。

おじいちゃんは、手に持っていたものを赤美ちゃんに渡しました。

それは、真っ赤なキラキラドレスでした。

「まあ！おじいちゃん、こんな高いドレスを頂いていいんですか？なんだか悪いわ。」

赤美ちゃんは申し訳なさそうに言いましたが、赤美ちゃんはそんな事を気にするような子ではありません。心の中では、こんなこと思っていたのです。

(やつと、キラキラドレスが手に入ったわv買ったのならさつさと持ってきてくれたらいいのに！危うく同じドレスを買うところだったじゃない！)

でも、おじいちゃんは赤美ちゃんの本性も知らずに、素直にその言葉を受け止めました。

「 いいんじゃないよ。この前、店の前でジツとそのドレスを見ていたじやろう？お前は、欲しいわけじゃないと言っておったが、おじいちゃんの目は誤魔化せんよ。」

おじいちゃんは優しく微笑みながら言いました。

しかし、おじいちゃんは騙されていたのです。

店の前でジツとドレスを見ていた事も、欲しくないと言った事も、孫に甘いおじいちゃんからドレスをもらうための演技だったのです。その結果、見事にドレスをGETしている赤美ちゃん。

「 おじいちゃんは凄いですね！尊敬します。本当にありがとうございます！」

「 可愛い、可愛い赤美のためじゃ。おじいちゃんは何だってするぞ。」

「 まあ、おじいちゃんったら。嬉しいけど、体も大切にしてくださいね。」

赤美ちゃんは、心配そうな顔でおじいちゃんの顔を覗き込みました。もちろんこれも演技です。

「 なあに！今回は、すこしばかり風邪をひいてしまっただけで、そんなに心配するような病気じゃないんじゃないよ。ほれ、もう元気になったぞ。」

おじいちゃんは、肩をまわしたり、腰をひねったりしました。

「 おじいちゃんの体が丈夫なのは知ってるし、健康なのもわかりました。でも、あまり無理をしないでくださいね。」

赤美ちゃんがそう言うと、おじいちゃんは感激したのか、少し目元を潤ませて何度もうなずきました。

こんな感動のシーンでも、赤美ちゃんの本音は・・・

（あんたにもしものことがあったら、私への貢物が減るじゃない。）

という、なんとも酷いものでした。

赤美ちゃん(3)

しばらく赤美ちゃんとおじいちゃんがお話をしていると、ドアをたたく音が響きました。

「誰じゃあ？」

おじいちゃんがドアに近づこうとしました。

「あっ、私が出ます。」

赤美ちゃんは、おじいちゃんを制してドアを開けに行きました。ドアを開けると、そこには硝子の靴を持った赤鬼が立っていました。

赤美ちゃんが、おじいちゃんの家に来るときに会った赤鬼です。

「きやあああああ!!！」

赤美ちゃんは、赤鬼を見たたん叫んでおじいちゃんのところに向かい、叫ばれた赤鬼は目を見開き呆然としました。

「ど、どうしたんじゃ!？」

突然、叫び声をあげた赤美ちゃんに驚いたおじいちゃんは、ドアの方を見ました。赤美ちゃんは赤鬼の方を指差して言いました。

「あの赤鬼が、私のことを嫁に言うって無理やり連れて行くこうとするんです！」

「えっ!?!ち、違う!俺はただ硝子の靴を返そうと」

「何?!?!？」

赤鬼が最後まで言い終わらないうちに、おじいちゃんが叫びました。「くそっ!この鬼め!この子が、鬼ヶ島へ鬼退治に行った、わし桃太郎の孫と知つての計画か!？」

「・・・えっ?」

そう、赤美ちゃんのおじいちゃんは、桃から生まれたといわれた、あの桃太郎だったのです。

それを聞いた赤鬼は慌てました。

「い、いや、だから俺は硝子の靴を」

「確かに、わしの孫は可愛い。だが、誰がお前みたいなアホ面でブ

ツサイクな体だけゴツイ鬼のところへ嫁にやらにやならんのだ！」

「俺はもう、こいつを嫁にしようなんて思っていない！こんなに怖い嫁は嫌だ。」

赤美ちゃんと同じ事を言われて傷ついた赤鬼は、涙を流しながらもそのことを言いました。

しかし、おじいちゃんはそんなこと、まったく聞いていないようで、「鬼退治に行つてから五十数年たったが、まだまだお主らには負けんぞ！」

と、言い指を口に当てて　ピイイー　と回りに響き渡る音を出しました。

すると、どこからか犬、猿、キジが現れました。

突然の出現に、赤美ちゃんと赤鬼が驚いていると、

「おう。相棒、どうした？」

と犬が言いました。次に猿が、

「今日は何か食べ物くれるのかい？」

と言いました。最後にキジが、

「桃太郎さん。お風邪をひいたと聞きましたが、大丈夫ですか？」

と言いました。

「心配かけてすまん。わしは大丈夫じゃ。それより、この鬼を追い出して二度と来れないようにこらしめてくれ！」

「あいよ！」「まかせとけい！」「わかったわ！」

三匹がそれぞれ言うのと、いっせいに赤鬼に飛び掛りました。

赤鬼は、それに驚き、急いで逃げようとしたが、犬に足を咬まれて倒れてしまいました。

そこに、すかさず猿が木の棒を持って赤鬼の頭を　バゴバゴ　殴り、キジが口ばしで赤鬼の体を　ブスブス　突き刺しました。

赤鬼は、それに絶えられず、何とかして外に出ると、そこにはおじいちゃんが凄いい力で赤鬼を見ていました。

その手には、刀が握られています。

赤鬼はそれを見ると、震える足に力を入れて一目散に逃げていきま

した。

その後ろでは、黒い笑みを浮かべながら硝子の靴を履きなおしている赤美ちゃんの姿がありました。

おじいちゃんは、赤美ちゃんの演技にまた騙されてしまったようです。

赤美ちゃんとおじいちゃんと犬と猿とキジは、一緒にパイを食べながらお話をし、楽しい時間を過ごしました。すると、

ゴーンゴーン

「あら、もうこんな時間。そろそろ帰らないと、お母さんが心配するわ。」

「そうか。気をつけて帰るんじゃよ。お母さんによろしくな。」

「はい。では、おじいちゃん、犬さん、猿さん、キジさん、さようなら。」

赤美ちゃんはみんなに手を振りながら帰っていきました。

それを、しばらく微笑みながら見送っていたおじいちゃん達は、唐突に厳しい顔つきになると、

「もう入ってきてても良いぞ。」

と、言いました。

「どうだ？うまくいったか？」

そう言つて、裏口から入ってきたのはなんと、さっきの赤鬼でした。

「ええ、このとおり。」

キジの口ばしには、一枚の紙が啜くちえられています。

「まったく。お前の孫が鬼ヶ島の宝の地図を拾っていたなんてな。」

と、犬が言いました。

「すんなり渡してくれるような子だったら、こんな事せんでもよかつたんやけどない。」

と、猿が言いました。

「仕方あるまい。もし、気づかれて、宝を盗られるのは嫌だろう？」
と、おじいちゃんが言いました。

それには、犬、猿、キジ、赤鬼も勢いよくうなずきました。

「でも、お前が地図をなくさなければ、こんな事にはならなかったんだがな。」

赤鬼がニヤリとしながら言いました。

「風で飛ばされてしまったんじゃないから、仕方ないだろう。まあ、返ってきたのだからよいではないか。」

さて、もうお分かりでしょうか？赤美ちゃんは、おじいちゃんがなくしてしまった宝の地図をたまたま拾って、それを知ったおじいちゃん達は、赤美ちゃんからこっそりその地図を取り返すために、赤鬼と一騒動起こし、どさくさにまぎれて赤美ちゃんから地図を盗もうとしたのです。

つまり、全て演技だったのです。その結果、地図は無事におじいちゃん達のところに戻ってきました。

「それにしても、実の孫を騙しといて、悪気というものが無いのか？お前は。」

犬が言いました。

それを聞いたおじいちゃんは、赤美ちゃんと同じような黒い笑みを浮かべると言いました。

「ふん。孫だろうと誰だろうと、必要なときは利用し、騙す。そんな事当たり前じゃろ。」

それを聞いた犬、猿、キジ、赤鬼は、

（お前はそういう奴だよな。）

（お前さんはそういう奴だとねい。）

（貴方はそういう人よね。）

（お前はそういう奴だよ。）

と、思いました。

さて、この中で一番演技力があるのは誰なのでしょう。

赤美ちゃん(3) (後書き)

終わりました。短かったですね。初連載がこんなのでよかったのか、かなり不安ですが、楽しく(?) 読んでいただけたらいいなと思います (^ ^ ;)

番外編も書こうと思っているので、良かったらそちらの方も覗いてみてください(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303c/>

赤美ちゃん

2010年10月11日18時31分発行